

高校生を対象とした赤ちゃんとのふれあい体験 実習の効果

— 赤ちゃんイメージと子ども・子育て観における変化 —

中京大学心理学部 小島 康生^注
中京大学心理学部 水野 里恵
大阪国際大学短期大学部 塚田 みちる

Educational effect of an experience of interacting with infants and their mothers on high-school students' perceptions of infants and their attitudes toward child-rearing

KOJIMA, Yasuo (School of Psychology, Chukyo University)
MIZUNO, Rie (School of Psychology, Chukyo University)
TSUKADA, Michiru (Osaka International University)

We explored the educational effect of an experience of interacting with infants and their mothers on the self-reported perceptions of infants and attitudes toward child-rearing in high-school students. In study 1, 32 third-year female students participated in groups of 4 or 5, and experienced semi-structured interactions with infants (e.g., holding, playing, bottle-feeding, walking in a stroller) and informal conversations with their mothers 2 times at an interval of about 6 months. In study 2, 35 third-year students (9 males and 26 females) participated in a similar program 3 times over about 6 months. A child-care program in the absence of the mothers was conducted in the third session of study 2. An analysis of self-reported questionnaires revealed increases in the scores regarding positive perceptions of infants in both studies 1 and 2. Moreover, interest in young children increased not only in students who participated in this program, but their counterparts who did not participate, suggesting that the interest in young children might increase generally during this period of adolescence. Interestingly, scores regarding positive expectations and confidence in taking care of young children increased, especially in participants who had an only limited experience in interacting with infants before they participated in this program in comparison with their counterparts who did not participate. Finally, about half of the participants reported positive and negative aspects of child-rearing (e.g., pleasurable but stressful, exhausting but worthwhile) as a result of informal conversations with the mothers. In Japan, after the 1980th, many people report that they do not interact with children before they themselves are parents. In the context of readiness for parenthood, the importance of an experience-based program for young people that includes various types of interactions with infants is discussed.

Key words: high-school students, educational effect, interactions with infants, readiness for parenthood, perceptions of infants, attitudes toward child-rearing

問題と目的

わが国では、第二次世界大戦後の1950年代より、加速度的な勢いで子どもの出生数が減少し、1989年の「1.57ショック」以降、現在に至るまで1.3前後を推移しつづけている。

わが国が直面する以上のような歴史的変遷の中で

いま問題になっていることのひとつが、子育ての当事者である親（特に母親）が、育児に対してストレスや不安、困難感を強く感じているという事実である。児童相談所での虐待相談件数は増加の一途をたどり、子ども、子育てをめぐる状況は深刻と言わざるを得ない。いっぽう、虐待には至らないまでも、日常的にストレスや不安を抱えている親も年々増え続けていると考えられており、その背景要因についても様々な議論が行われている。

そうしたなかで問題視されているのが、子ども、

注 ykojima@lets.chukyo-u.ac.jp

特に乳児との接触経験の減少である。原田(2004)は、1980年代に行った調査の結果(いわゆる「大阪レポート」と2000年代の調査結果(同じく「兵庫レポート」)を比較し、わずか二十数年の間にも、子どもと接触する経験が著しく減少していたこと、出産以前に子どもとの接触がなかった人のほうが育児ストレスが大きいことなどをデータとして示し、大きな反響を呼んだ。こうして、親になった人を支援することに力を注ぐべきなのはもちろんのこと、中長期的な視点に立ち、今後、親になっていく若者世代に子どもと触れ合う機会を提供していくことも同じくらい重要との認識が生まれていったのである(陳, 2011; 伊藤, 2003)。すなわち、時代の流れを考えると、情緒面、態度面、そして知識の面において親としての役割を果たすに十分なレディネスを社会が率先して若者に提供していく仕組みづくりが急務であり、これは「親準備性」の教育などとも呼ばれている(井上・深谷, 1983)。

親準備性の習得には乳幼児との過去の接触経験が大きく関与することがこれまでに多くの研究で確かめられている。例えば、中西・牧野(1989)は、高校生を対象にした質問紙調査を通じて、中学時代以降に子どもと関わった経験を持つ生徒ほど、自分が親になることを意識する程度が高かったと報告している。また、星野・日瀨・吉田(2008)は、大学生のデータから、子どもと直接関わった経験を持つ学生ほど、将来、自分が子どもを持ち、育てることに対するイメージが具体的であったと報告している。榎澤・福本・岩立(2009)はさらに、過去の子どもの接触経験の影響は男子よりも女子に対しての方が強くあらわれるとしている。

わが国では、1998年に中学、そして翌1999年には高校の学習指導要領において、乳幼児とのふれあいや交流を促進することが告示され、2000年の中央教育審議会報告「少子化と教育について」でも、「子育ての大切さ、親の役割、更には地域の一員としての近隣の子どもとのかかわり方等について考えさせる『子育て理解教育』という視点を持って、これらの学習を教育課程全体の中で適切に位置づけ、教育活動の展開を図る」ことと明記された。以上のような流れを経て、2000年前後から、乳幼児とのふれあいを推進するための取り組みが全国各地で急速な勢いで広がっていったのである。

乳幼児とのふれあい体験実習は、学校の授業、なかでも総合的な学習のなかに組み込まれることが多

く、次いで多いのが家庭科とされる。形式としては、幼稚園、保育所、子育て支援センター等の協力のもとで、そこへ生徒が出向くかたちをとるものが多く(藤後, 2001; 鎌野・伊藤, 2008; 大野・松村, 1998; 岡野, 2006; 矢萩, 2007; 佐藤, 2004)、現場に出かける前に講義形式による事前学習や人形を使った模擬体験、ビデオ等による学習などが取り入れられることもある(藤原・猪野, 2002; 伊藤, 1987; 吉村, 2006)。これに対し、母子とのふれあい、あるいは妊婦とのふれあいをプログラムに導入するもの(吉村, 2006; 岡野, 2005など)、あるいは各家庭に学生が自ら足を運ぶといった生活体験型のものも少数ながらある(川瀬, 2009; 川村・森, 2006)。

ふれあい体験の効果については、子どもに対する関心や肯定的感情の増加(鎌野・伊藤, 2008; 大野・松村, 1998; 藤原・猪野, 2002)、自分が親になるイメージの明確化(川瀬, 2009)などの報告があるほか、乳児に対する否定的イメージを踏まえた肯定的イメージの獲得(騒がしいが、でもかわいい)、さらには子育ての両価的側面(大変だが喜びも大きい)への気づきも報告されている(藤後, 2001; 下中・井上・玉城・金城・西平・賀数, 2009)。

以上のように全国に広がりを見せるふれあい体験実習だが、それらには次のような問題が指摘できる。第一に、先にも述べた通り、幼稚園・保育所等、集団の場での幼児との関わりに比重が置かれやすいため、遊びがプログラムの中心になりやすく、「子育て」の部分に触れる機会が少ないこと、第二に、一部の例外を除いて(岡野, 2005; 川瀬, 2009; 谷向, 2010)、一度きりのふれあい体験でその効果を測ろうとするものが多いこと、そして第三に、体験前後の比較だけが単純に行われていることが多く、個人差等に注目した分析があまりなされていないこと(例外として、佐藤, 2004)などである。

これらのことを踏まえて、本研究では、高校生を対象に、数回にわたる親子とのふれあい体験実習の中で、生徒の意識の変化を探ることを目指した実習を計画した。後述の通り、高校3年生対象の選択家庭科の授業時間を利用し、同じ親子とのふれあいをおよそ半年の期間を置いて2回ないし3回実施した。このことにより、子どもの成長・発育を単なる知識としてではなく身をもって体験し、またその間に母親の子育てに対する考えや日常生活の変化についても生の声を確認できると考えた。また、これまでに

ない取り組みとして、本論後半で紹介する研究2では、母親が不在の場面で生徒が対象乳児を託児するというプログラムを探索的に導入した。このような体験を通して、生徒の乳幼児に対するイメージや、広い意味での親準備性への効果を数量的かつ記述的に確認したいと考える。

研究 1

研究1は、親子とのふれあい体験が赤ちゃんに対するイメージ、子ども・子育て観にもたらす変化を探索的に確かめるため、2009年度に実施された。

方 法

1. 協力者

(1) 実習に参加した生徒

中京大学附属中京高等学校の協力のもと、3年生対象の選択家庭科の授業時間を利用して、親子とのふれあい体験実習を行った。参加した生徒は32名、すべて女子であった。

(2) 親子

親子8組にご協力いただいた。このうち6組には、第一著者の縁故で協力をお願いした。また他の2組は、児童館、保健所など関係各所で配付したチラシを読んで、協力を申し出てくださいました。赤ちゃんは2009年6月時点で4ヵ月齢から11ヵ月齢、男児が3名、女児が5名であった。いずれも第一子であった。

2. 手続き

本企画は、事前授業、1回目の実習(2009年6月)、2回目の実習(同11月)の3回で構成されていた¹⁾。実習は2回とも同じ親子に協力していただいた。

(1) 事前授業

1回目の実習に先立ち、2009年5月末に生徒全員を対象に事前講義を行った。内容は、妊婦ベストの着用による妊婦体験、赤ちゃんの人形を用いた抱っこ体験、赤ちゃんの心身の発育、実習に来る協力者親子のビデオ等による紹介、赤ちゃんと関わる際の注意事項の確認、現代の子育て事情などに関するものであった。第一著者のほか地域の助産師、子育て支援サークルのスタッフ、心理学を専攻する学生らが講師をつとめた。

(2) 1回目の実習

2009年6月に1回目のふれあい体験実習を行った。生徒4~5名と1組の親子で一つの班を構成し、それぞれの班に筆者らスタッフ、心理学を専攻する学部学生ら1~2名が進行役として入り、実習を行った(写真1)。はじめに全員が自己紹介を行い、抱っこ体験や赤ちゃんとの遊び体験、お母さんへの質問コーナー、校内でのベビーカー押し体験などのあと、最後に実習で学んだことを班ごとに発表してもらった。



写真1. ふれあい体験実習の様子

(3) 2回目の実習

2009年11月に2回目のふれあい体験実習を行った。基本的に1回目と同じメンバーで班を構成し、進行役の指示にしたがい、赤ちゃんの成長の観察や記録、お母さんの生活の変化についてのインタビューなどを行った。後半は、お母さん同伴のもとで20分程度、生徒が自由に赤ちゃんと遊ぶ時間を設けた。最後に、印象に残ったこと、感想などを班ごとに発表してもらい、記念写真を撮影して実習を終えた。

3. 質問紙調査

実習を受ける前(5月)と2回目の実習を終えた後(12月)の2回、参加生徒全員を対象に質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、以下の通りであった。

(1) 乳幼児との関わり経験

過去半年の間に、次にあげる各種の関わりを赤ちゃんや子どもに対して行ったことがあるかを「1. まったくなかった」、「2. ほとんどなかった」、「3. ときどきあった」、「4. 頻繁にあった」の4件法で尋ねた。内容は、「おむつを換える」、「ミルクを飲ませる」、「からだに触る」、「抱っこする」、「遊び相手をする」、「絵本を読む」、「着替えを手伝う」、「お風呂

に入れる」,「知らない赤ちゃんや子どもに笑いかける」,「知らない赤ちゃんや子どもに話しかける」の10項目であった。これは,5月の調査においてのみ回答を求めた。

(2) 赤ちゃんイメージ

赤ちゃんに対するイメージについて,先行研究を参考にしつつ12種類の形容詞対を提示し,6件法で回答を求めた。形容詞対は,「弱い-強い」,「おとなしい-やかましい」,「無力な-能力のある」,「静かな-うるさい」,「頼りない-頼もしい」,「きたない-きれいな」,「単純な-複雑な」,「不自由な-自由な」,「おとっている-すぐれている」,「ちいさい-おおきい」,「不活発な-活発な」,「つまらない-おもしろい」であった。5月,12月の両方において回答を求めた。

(3) 子ども・子育て観

伊藤(2003),岩治(2009),中西・栗津(1996,1997)などを参考に,21項目からなる子ども観・子育て観尺度を作成した。原文で表現がわかりにくかったものは加筆・修正を施した。5月,12月の両方の調査で尋ねたが,12月の調査では,回答者の負担を軽減するため,5月のデータの分析結果を踏まえ,項目数を21から11に縮小した²⁾。

(4) 自由記述

12月の調査では,赤ちゃんの成長やお母さんのお話を通じて印象に残ったこと,実習全体の感想などを自由記述で答えてもらった。なお,これについては,本論文では分析対象としない。

結 果

1. 乳幼児との関わり経験

5月に実施した質問紙調査での回答をもとに,乳幼児との過去の関わり経験についてクラスター分析(Ward法)を行った。平方ユークリッド距離を測定し,デンドログラムの構造から生徒間の類似度をみたところ,2クラスターに分類するのが適当と考えられた。第1,第2クラスターに分類されたのはそれぞれ19名,13名であった。

10項目すべてについてクラスター間の得点比較を行ったところ,2項目(おむつを換える,お風呂に入れる)を除く8項目において,第1クラスターに比べ第2クラスターの方が,有意に得点が高いことがわかった($t_s(30) < -2.61, p_s < 0.05$)。第1クラスターは赤ちゃんや子どもとの関わり経験がほとんどない生徒,第2クラスターは,抱っこや遊び相手など多少の関わり経験があった生徒と考えられた(表1)。

2. 赤ちゃんに対するイメージの分析

実習に参加した生徒が赤ちゃんに対してどのようなイメージを抱いているか,またそれが2回の実習を経験して変化したかを分析した。実習前のデータについて,12の形容詞対に対する回答結果をもとに因子分析(主因子法,プロマックス回転)を行ったが,うまく因子を構成することができなかった。このため,項目ごとに実習前の回答と実習を終えた後の回答の比較を行った。対応のあるt検定を実施したところ,3項目(おとなしい-やかましい,静かな-うるさい,不活発な-活発な)を除き,有意

表1. 乳幼児との過去の関わり経験(2009年度データ)

項 目	クラスター	
	1 (n=19)	2 (n=13)
おむつを換える	1.00 (0.00)	1.23 (0.60)
ミルクを飲ませる	1.00 (0.00)	1.46 (0.78)
からだに触る	1.58 (0.61)	3.23 (0.44)
抱っこする	1.16 (0.37)	3.23 (0.44)
遊び相手をする	1.26 (0.56)	3.00 (0.71)
絵本を読む	1.00 (0.00)	1.69 (1.03)
着替えを手伝う	1.00 (0.00)	1.85 (0.90)
お風呂に入れる	1.00 (0.00)	1.15 (0.38)
知らない赤ちゃんや子どもに笑いかける	2.26 (0.81)	3.23 (0.93)
知らない赤ちゃんや子どもに話しかける	1.47 (0.70)	2.62 (0.96)

注:()の数値は標準偏差をあらわす。

な(ないし有意に近い)変化が認められた(表2)。いずれも肯定的なイメージの向上をあらわす結果であった³⁾。

3. 子ども・子育て観尺度の分析

実習前に行った調査での子ども・子育て観尺度の回答をもとに、天井効果、フロア効果のあった8項目を除外したのち、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。複数の因子にまたがって負荷量が高かった1項目をさらに除外し、最終的に3因子構造と解釈することにした(表3)。因子負荷量の値が高かった項目の内容から、第1因子を「子どもへの興味・関心」、第2因子を「子ども・子育てを敬遠する気持ち」、第3因子を「子育てをすることへの自信」と名付けた。因子負荷量が0.50以上の項目を元に信頼性係数を計算したところ、順に0.86, 0.72, 0.88であった。

次に、12月に行った調査データについても、先の3因子それぞれについて、実習前のデータと同じ項目から信頼性係数を求めた。その結果、第1因子は0.91、第2因子は0.57、第3因子は0.84となった。3つの因子について、因子負荷量が0.5を超えた項目の加算平均値を求めて尺度得点とし、その尺度得点間の相関を分析したところ、実習前、実習後のいずれのデータにおいても、第1因子と第3因子の間に有意な正の相関が、その他の組み合わせ(第1因子と第2因子、第2因子と第3因子)で有意な負の相関が認められた(実習前: $|r|(32) > 0.45$,

表2. 実習前後での赤ちゃんイメージの変化(2009年度データ)

項目	実習前(5月)	実習後(12月)	t値
弱い-強い	2.17 (0.92)	3.29 (1.55)	-4.37 ***
おとなしい-やかましい	4.60 (1.12)	4.36 (0.91)	1.00
無力な-能力のある	3.19 (0.90)	3.96 (1.25)	-2.65 *
静かな-うるさい	4.52 (0.96)	4.40 (0.87)	0.55
頼りない-頼もしい	2.19 (0.98)	3.12 (1.21)	-3.55 **
きたない-きれいな	3.83 (1.09)	4.42 (1.14)	-2.23 *
単純な-複雑な	3.00 (1.38)	4.12 (1.62)	-3.13 **
不自由な-自由な	4.00 (1.18)	4.71 (1.30)	-2.00 +
おとっている-すぐれている	3.09 (0.79)	3.83 (1.23)	-3.36 **
ちいさい-おおきな	1.50 (0.66)	2.00 (1.18)	-2.08 *
不活発な-活発な	5.20 (0.96)	5.52 (0.71)	-1.40
つまらない-おもしろい	4.92 (0.84)	5.58 (0.64)	-3.94 ***

注: + $p < 0.06$; * $p < 0.05$; ** $p < 0.01$; *** $p < 0.001$

表3. 子ども・子育て観尺度に関する因子分析の結果(2009年度データ)

項目	因子		
	1	2	3
第1因子: 子どもへの興味・関心			
子どもが泣いていると何とかしてあげたいと思う	0.881	0.146	-0.029
テレビに赤ちゃんが出てくると興味をもって見る	0.844	0.113	0.070
子どもが遊んでいるのを見るのはおもしろい	0.784	-0.239	-0.195
外で子どもの姿をついで追っていることがある	0.731	-0.211	-0.033
将来、親になったときのことを想像することがある	0.540	0.163	0.180
第2因子: 子ども・子育てを敬遠する気持ち			
遊んでいる子どもの歓声をうるさいと感じる	0.016	0.706	-0.083
赤ん坊の泣き声を聞くとイライラする	-0.221	0.661	0.025
子育てにはいろいろわずらわしいこともあると思う	0.156	0.638	0.019
将来、毎日の生活に疲れ果て、イライラしている自分を想像する	0.137	0.498	-0.348
第3因子: 子育てをすることへの自信			
将来、子どもをうまく育てられるか心配だ	0.155	0.104	-0.696
子どもの相手をうまくやれると思う	0.269	0.014	0.687
小さい子どもの世話には自信がある	0.348	0.018	0.562
因子寄与	4.506	3.098	3.277

因子負荷量が0.500以上(あるいは-0.500以下)のところを四角で囲んだ。

$p < 0.01$: 実習後 : $|r| (28) > 0.41, p < 0.05$ 。

4. 実習への参加と子ども・子育て観との関連

乳幼児との関わり経験（クラスター）を被験者間要因、実習前後の時期を被験者内要因とし、3つの因子の尺度得点について2要因の分散分析を行った（表4）。第1因子については、調査時期の主効果が認められ（ $F(1, 26) = 13.41, p < 0.05$ ）、12月の値のほうが有意に高かった。第2因子についても調査時期の主効果が有意傾向で（ $F(1, 26) = 3.55, p < 0.08$ ）、12月の値のほうがやや低い値であった。第3因子については、関わり経験の主効果、時期の主効果が有意であった（それぞれ、 $F(1, 26) = 6.42, p < 0.05$; $F(1, 26) = 11.22, p < 0.01$ ）。第2クラスターの生徒（関わり経験がもともと多かった生徒）のほうが値が高く、実習前より実習後のほうが値が低かった。

考 察

赤ちゃんに対するイメージ、子どもへの興味・関心については、ふれあい体験実習への参加を通して、おおむね肯定的な変化が見られ、この結果は先行研究とも一致するものであった（鎌野・伊藤, 2008; 藤原・猪野, 2002 など）。特に、実習に参加する前と後での比較から、子どもへの興味や関心が増したことは評価に値すると考える。子どもとふれあう機会が乏しい高校生にとって、自分が親になり子育てをする姿を想像することは、そうたやすいことではない。まずは子どもという存在に興味や関心を持ってもらうことが第一歩であると考えれば、本実習は十分に意義のあるものだったといえよう。

いっぽう、子育てをすることへの自信が低下したという結果については、どのように考えればよいだろうか。端的に言えば、これは「子どもに興味は沸いたが、自信はなくなった」ということである。子

どもや子育てを敬遠する気持ち自体はやや低下していることから、自信の低下は否定的な意味合いを持つとは考えにくい。子育ての当事者である母親から日常生活の様子を聞いたり、自身で子どもと接したりした経験を通して、子どもを育てるのは生半可なことではないという実感が生じたと考えるのが妥当であろう。「本当の姿」を知ったことで、やや腰が引けてしまったところがあったのかもしれない。

研究1の問題点としては、ふれあい体験に参加した生徒のデータを収集したのみで、得点の上昇が実習への参加に起因したものなのか、それとも単に、この時期に特有の変化なのか特定できなかったことがあげられる。事実、この時期には一般的に赤ちゃんへの興味が増すという報告もあり（伊藤, 2003）、この点については再検討の必要性が確認された。また、やむを得ないこととはいえ、実習の回数が当初の計画より少なかったことも改善の余地を残すところであった。以上を踏まえて実施されたのが以下の研究2である。

研 究 2

研究2は2010年度に実施された。実習の内容に関して研究1と異なるところは、ふれあい体験実習に参加しなかった生徒のデータもあわせて収集した点、そして実習を2回から3回に増やした点であった。また後述するように、3度目の実習では、試みに生徒だけによる託児体験も実施した。

方 法

1. 協力者

(1) 実習に参加した生徒

前年度と同じく、3年生対象の選択家庭科の授業時間内に実習を行った。参加した生徒は35名、うち男子生徒が9名含まれていた。

表4. 実習前後での子ども・子育て観の変化（2009年度データ）

子ども・子育て観	過去の関わり経験：第1クラスター ^a		過去の関わり経験：第2クラスター ^a	
	実習前（5月）	実習後（12月）	実習前（5月）	実習後（12月）
第1因子：子どもへの興味・関心	2.86 (0.76)	3.08 (0.75)	2.97 (0.63)	3.32 (0.66)
第2因子：子ども・子育てを敬遠する気持ち	2.51 (0.62)	2.24 (0.56)	2.30 (0.67)	2.18 (0.46)
第3因子：子育てをすることへの自信	2.10 (0.73)	1.92 (0.65)	2.89 (0.69)	2.47 (0.69)

^a 第1クラスターは、関わり経験がほとんど皆無であった生徒、第2クラスターは、多少の関わり経験があった生徒である。

注：（ ）の数値は標準偏差をあらわす。

(2) 親子

親子8組にご協力いただいた。このうち2組は、第一著者や運営スタッフの縁故で協力をお願いした方々、他の6組は前年度と同様、関係各所で配付したチラシを見て応募してくださった方々であった。赤ちゃんは2010年6月時点で生後2ヵ月半から8ヵ月齢、男児が5名、女児が3名であった。第一子が5名、第二子が1名、第三子以降が2名であった。

2. 手続き

(1) 事前授業

前年度と同様、1回目の実習に先立ち、事前講義を行った。内容は、赤ちゃんの心身の発育、実習に来る協力者親子のビデオ等による紹介、赤ちゃんに関わる際の注意事項の確認、現代の子育て事情などであった。第一著者、子育て支援サークルのスタッフ、心理学を専攻する学部学生らが講師をつとめた。

(2) 1回目の実習

2010年6月に1回目の実習を行った。生徒5名～6名と1組ないし2組の親子で一つの班を構成し、それぞれの班に筆者らスタッフ、心理学を専攻する学部学生ら1～2名が進行役として入り、実習を行った。内容は前年度と基本的に同じであった。

(3) 2回目の実習

2010年10月に2回目の実習を行った。メンバーは1回目の実習と同じであった。赤ちゃんの成長やお母さんの生活の変化についてお話を伺ったあと、抱っこ体験、遊び体験などを行った。一部の班は、校内でのベビーカー押し体験も行った。最後に、印象に残ったこと、感想などを班ごとに発表してもらった。

(4) 3回目の実習

2010年11月に3回目の実習を行った。メンバーは1、2回目の実習と同じであった。この日は、お母さんが別室に移動し、生徒だけで赤ちゃんを託児する体験を実施した。託児に先立ち、生徒は、赤ちゃんが泣いてしまった時の効果的な対応、お気に入りのおもちゃ等の説明をお母さんから受け、おむつ、おやつ等も置いていってもらった⁴⁾。託児体験は30分程度として、お母さんが戻ってきたあと、その日、体験したことで印象に残ったこと、感想などをまとめ、班ごとに発表してもらった。最後に、全員で記念撮影を行い、生徒からお母さんに感謝のメッセージカードをお渡しして、実習を終えた。

3. 質問紙調査

実習を受ける前(5月)と3回目の実習を終えた後(12月)の2回、生徒全員を対象に質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、2009年度と同じであった。なお、この質問紙調査には、ふれあい体験実習に参加しない同校の3年生にも協力をお願いした。実習に参加しなかった生徒のデータは42名分(男子16名、女子26名)であった。

結 果

1. 乳幼児との関わり経験

本実習に参加した生徒、参加しなかった生徒すべてを対象に、乳幼児との関わり経験についてクラスター分析(Ward法)を行い、平方ユークリッド距離を測定して生徒間の類似度を調べた。デンドログラムの構造から、2クラスターに分類するのが適当と考えられた。第1、第2クラスターに分類された

表5. 乳幼児との過去の関わり経験(2010年度データ)

項 目	クラスター	
	1 (n=56)	2 (n=18)
おむつを換える	1.00 (0.00)	1.94 (1.11)
ミルクを飲ませる	1.00 (0.00)	2.11 (1.02)
からだに触る	1.68 (0.88)	3.44 (0.51)
抱っこする	1.48 (0.81)	3.50 (0.51)
遊び相手をする	1.79 (0.87)	3.56 (0.51)
絵本を読む	1.09 (0.29)	2.50 (1.10)
着替えを手伝う	1.07 (0.26)	2.83 (0.92)
お風呂に入れる	1.02 (0.13)	2.17 (1.10)
知らない赤ちゃんや子どもに笑いかける	2.30 (0.97)	2.67 (1.03)
知らない赤ちゃんや子どもに話しかける	1.46 (0.76)	2.33 (0.97)

注：()の数值は標準偏差をあらわす。

のはそれぞれ56名、18名であった（回答に不備のあった3名は分析対象から除外した）。

10項目すべてについてクラスター間の得点比較を行ったところ、1項目（知らない赤ちゃんや子どもに笑いかける）以外すべてにおいて、第1クラスターより第2クラスターの方が、得点が高いことがわかった（ $t_s(72) < -3.93, p_s < 0.01$ ）。第1クラスターは、赤ちゃんや子どもとの関わり経験がほとんどなかった生徒、第2クラスターは、多少の関わり経験があった生徒であった（表5）。実習に参加した生徒と参加しなかった生徒で、それぞれのクラスターに分類された人数の分布には偏りがなかった。性別による偏りもなかった。

2. 赤ちゃんに対するイメージの分析

実習に参加した生徒、参加しなかった生徒すべてのデータをもとに、赤ちゃんに対するイメージについて尋ねた12の形容詞対から、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。最終的に、項目10（ちいさいーおおきい）、項目12（つまらないーおもしろい）を除外して10項目で分析を行い、3因子構造と解釈した（表6）。因子負荷量が高かった項目の内容を検討し、第1因子を「騒がしさ」、第2因子を「たくましさ」、第3因子を「精巧」と名付けた。負荷量が0.4以上の項目から信頼性係数を計算したところ、順に0.64、0.66、0.56となり、やや低い値であることがわかった。しかし、第1因子、第3因子については、それぞれ項目11（不活

発なー活発な）、項目7（単純なー複雑な）を外すことで値が0.71、0.65まで上昇したことから、これらを除いて加算平均値を計算し尺度得点とした。

実習後のデータについても同じ因子を想定し、実習前のデータと同じ項目から信頼性係数を計算した。第1因子は0.81、第2因子は0.71であったが、第3因子は0.44と、かなり低い値であった。このため、以降の分析は第1因子と第2因子についてのみ行った。実習前、実習後いずれのデータにおいても、これら2つの因子の尺度得点間に相関は認められなかった。

3. 子ども・子育て観尺度の分析

子ども・子育て観尺度21項目について、天井効果とフロア効果がみられた5項目を除外したあと、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。項目を選びだすプロセスでは、先に報告した研究1のデータと比較することも念頭に置き、項目が大幅に食い違わないよう配慮した。最終的には、さらに5項目を除外し、3つの因子を抽出した（表7）。項目の内容を吟味し、第1因子を「子どもへの興味・関心」、第2因子を「子育てをすることへの自信」、第3因子を「子ども・子育てを敬遠する気持ち」と名付けた。

因子負荷量が0.4以上であった項目から信頼性係数を計算したところ、第1因子は0.78、第2因子は0.76、第3因子は0.66となった。実習後のデータにおいても全く同じ項目で信頼性係数を調べたところ、順に0.80、0.78、0.52となった。実習前、実

表6. 赤ちゃんイメージに関する因子分析の結果（2010年度データ）

項 目	因 子		
	1	2	3
第1因子：騒がしさ			
静かなーうるさい	0.741	-0.126	-0.008
おとなしいーやかましい	0.625	-0.065	-0.213
不活発なー活発な	0.548	0.059	0.263
第2因子：たくましさ			
無力なー能力のある	0.098	0.820	0.047
弱いー強い	-0.044	0.680	-0.244
頼りないー頼もしい	-0.109	0.460	0.120
第3因子：精巧			
おとっているーすぐれている	0.079	0.006	0.893
きたないーきれい	-0.161	-0.035	0.545
単純なー複雑な	0.077	-0.145	0.426
不自由なー自由な	0.382	0.315	-0.009
因子寄与	1.479	1.908	1.921

因子負荷量が0.400以上のところを四角で囲んだ。

習後それぞれについて、因子負荷量が0.4以上の項目の加算平均値を因子ごとに求めて尺度得点とし、以降の分析を行った。

実習前のデータについて、実習に参加した生徒と参加しなかった生徒とで、これら3因子の尺度得点に違いがないか調べた。いずれの因子についても差は有意ではなかった（ $|t|s < 0.84$, ns）。このことにより、実習に参加した生徒と参加しなかった生徒との間には、子ども・子育て観にもともと違いがなかったことが確認された。

4. 実習への参加と赤ちゃんイメージ、子ども・子育て観との関連

(1) 赤ちゃんイメージとの関連

先に行った赤ちゃんイメージの第1因子（騒がし

さ）と第2因子（たくましさ）の尺度得点について、実習前後の時期を被験者内要因、生徒の性別、過去の関わり経験、実習への参加の有無を被験者間要因として分散分析を行った。その結果、第1因子については主効果、交互作用ともになかったが、第2因子については実習への参加の主効果が有意傾向であった（ $F(1, 47) = 3.74$, $p = 0.05$ ）。実習に参加した生徒のほうが高い値であった（表8）。

(2) 子ども・子育て観との関連

実習前後の子ども・子育て観の尺度得点について、実習前後の時期を被験者内要因、過去の関わり経験、実習への参加の有無を被験者間要因として、分散分析を行った（表9）。第1因子（子どもへの興味・関心）については調査時期の主効果が有意であり

表7. 子ども・子育て観尺度に関する因子分析の結果（2010年度データ）

項目	因子		
	1	2	3
第1因子：子どもへの興味・関心			
子どもが遊んでいるのを見るのはおもしろい	0.836	0.013	-0.020
外で子どもの姿をつい目で追っていることがある	0.831	-0.040	0.022
テレビに赤ちゃんが出てくると興味をもって見る	0.488	0.156	0.091
第2因子：子育てをすることへの自信			
子どもの相手をうまくやれると思う	-0.042	0.782	-0.094
小さい子どもの世話には自信がある	-0.058	0.608	0.049
子どもが泣いていると何とかしてあげたいと思う	0.275	0.587	0.052
将来、親になったときのことを想像することがある	0.101	0.534	-0.061
第3因子：子ども・子育てを敬遠する気持ち			
赤ん坊の泣き声を聞くとイライラする	-0.162	0.119	0.728
将来、子どもをうまく育てられるか心配だ	0.123	-0.049	0.532
遊んでいる子どもの歓声をうるさいと感じる	-0.156	0.009	0.520
子育てにはいろいろわずらわしいこともあると思う	0.252	-0.130	0.512
因子寄与	2.59	2.49	1.60

因子負荷量が0.400以上のところを四角で囲んだ。

表8. 実習前後での赤ちゃんイメージの変化（2010年度データ）

赤ちゃんイメージ	実習に参加した生徒			
	過去の関わり経験：第1クラスター ^a		過去の関わり経験：第2クラスター ^a	
	実習前（5月）	実習後（12月）	実習前（5月）	実習後（12月）
第1因子：騒がしさ	4.39 (0.89)	4.27 (0.97)	4.00 (1.07)	4.00 (1.51)
第2因子：たくましさ	2.91 (0.87)	3.36 (1.16)	3.04 (0.70)	3.54 (1.17)
赤ちゃんイメージ	実習に参加しなかった生徒			
	過去の関わり経験：第1クラスター ^a		過去の関わり経験：第2クラスター ^a	
	実習前（5月）	実習後（12月）	実習前（5月）	実習後（12月）
第1因子：騒がしさ	3.89 (0.90)	4.22 (1.15)	4.40 (0.65)	3.80 (0.76)
第2因子：たくましさ	2.60 (1.01)	2.68 (1.09)	3.00 (0.53)	2.73 (0.83)

^a 第1クラスターは、関わり経験がほとんど皆無であった生徒、第2クラスターは、多少の関わり経験があった生徒である。

注：（ ）の数値は標準偏差をあらわす。

($F(1, 51)=6.34, p<0.05$), 実習後のデータの方が得点が高かった。

第2因子(子育てをすることへの自信)については、実習への参加の有無と過去の関わり経験の交互作用が有意傾向であった($F(1, 52)=3.15, p=0.08$)。また、3つの変数すべての交互作用も有意傾向であった($F(1, 52)=3.14, p=0.08$)。そこで、関わり経験のクラスターごとに、実習への参加の有無と過去の関わり経験の交互作用について詳細を検討した。まず、第1クラスター(過去に赤ちゃんや子どもと関わった経験がほとんどなかった生徒)について、実習前、実習後それぞれの、実習への参加の有無の単純主効果をみたところ、いずれも有意ではなかった($F_s(1,41)<2.59, ns$)。次に、実習に参加した生徒、参加しなかった生徒のそれぞれについて単純主効果をみたところ、実習に参加しなかった生徒では、実習前後での数値の差が有意でなかったが、実習に参加した生徒では、数値の変化に有意傾向が認められた($F(1, 41)=3.52, p=0.06$)。つまり、過去に赤ちゃんや子どもとの関わり経験がほとんどなかった生徒に関しては、実習前よりも実習を経験した後の方が、値がやや上昇したという結果であった。続いて、第2クラスター(過去に赤ちゃんや子どもと関わった経験が多少あった生徒)についても、同様に交互作用の下位検定を行った。実習前、実習後いずれにおいても、実習への参加の単純主効果は有意ではなかった。また、実習に参加した生徒、参加しなかった生徒のいずれにおいても、実習前後での数値の変化は有意ではなかった。

第3因子については、調査時期の主効果が有意傾向で($F(1, 52)=3.13, p<0.09$)、実習後のほうが

値がやや高いという結果であった。その他の主効果、交互作用はなかった。

5. 自由記述によって得られた回答

3回目の実習を終えた後に行った質問紙調査では、実習の中で自分が経験したりお母さんたちから聞いたりした話の中で何がもっとも印象に残っているか、子育てに対する考えにどのような変化があったかを自由記述で答えるよう求めた。その回答を「実習を経験して感じたり気づいたりしたこと」、「お母さんから聞いた話で印象に残ったこと」、「実習全体を通じて考えたこと」の3つの枠組みで整理しなおしたものが表10である。

「実習で感じたり気づいたりしたこと」として最も多くの生徒が記述していたのは、成長のはやさに関してであった。約半年の成長を目の当たりにし、著しい変化があったことを実感したものと思われる。「お母さんの話で印象に残ったこと」としては、子育てが大変だということ、またその大変さに関係して母親が語ったことが強く心に残ったようであった。さらに、「実習全体を通じて感じられたこと」の中では、「子育ては生半可のことではない」、「覚悟がある」などの記述に代表されるように、子育ての正負両面への言及が多かったことが特徴であった。

考 察

2010年度に実施した研究2では、研究1以上に示唆に富んだ結果が得られた。まず、赤ちゃんに対するイメージに関しては、第2因子として抽出された「たくましさ」の得点が、実習に参加した生徒の

表9. 実習前後での子ども・子育て観の変化(2010年度データ)

子ども・子育て観	実習に参加した生徒			
	過去の関わり経験：第1クラスター ^a		過去の関わり経験：第2クラスター ^a	
	実習前(5月)	実習後(12月)	実習前(5月)	実習後(12月)
第1因子：子どもへの興味・関心	2.75 (0.76)	3.16 (0.56)	3.08 (0.66)	3.21 (0.50)
第2因子：子育てをすることへの自信	2.66 (0.62)	2.85 (0.59)	3.19 (0.51)	3.06 (0.59)
第3因子：子育てを敬遠する気持ち	2.35 (0.60)	2.53 (0.34)	2.41 (0.50)	2.41 (0.52)
子ども・子育て観	実習に参加しなかった生徒			
	過去の関わり経験：第1クラスター ^a		過去の関わり経験：第2クラスター ^a	
	実習前(5月)	実習後(12月)	実習前(5月)	実習後(12月)
第1因子：子どもへの興味・関心	2.68 (0.85)	3.03 (0.70)	2.67 (1.05)	3.00 (1.03)
第2因子：子育てをすることへの自信	2.93 (0.46)	2.94 (0.68)	2.50 (0.88)	2.90 (0.74)
第3因子：子育てを敬遠する気持ち	2.46 (0.46)	2.68 (0.48)	2.45 (0.78)	2.65 (0.42)

注：() の数値は標準偏差をあらわす。

表 10. 自由記述によって得られた回答

記述内容	定義	代表的な記述	記述者数
I 実習を経験して感じたり気づいたりしたこと			
1. 赤ちゃんについての記述	赤ちゃんを見たり触ったり遊んだりしたこと から喚起された自分の感情についての言及	「かわいい」、「癒された」、「もっと触りたい」など	6
(1) 心理・情緒的反応	自分自身あるいはおとなとの比較においての 赤ちゃんの特徴への言及	「なんでも口に入れる」、「ひとつの物に執着する」、「泣くことで何かを伝えようとしている」など	3
(2) “赤ちゃん”ならではの 行動	3 回の実習を通して感じられた赤ちゃんの成長 長についての言及。運動能力、外見、コミュニケーション能力、ことば、食べ物、興味の 範囲など	「首が据わっていた」、「はいはいができるようになっていた」、「歩けるようになっていた」、「からだが大きくなっていった」、「髪の毛が伸びた」、「人見知りをするようになっていった」、「おじぎができるようになっていった」、「ことばが増えた」、「お菓子を食べていた」、「なんにでも興味を示すようになっていった」など	18
(4) 個人差	同じ赤ちゃんでも様々に異なることへの言及	「泣く子もいるが、泣かない子もいる」など	3
(5) お母さんの存在	赤ちゃんにとってもお母さんの存在の大きさ についての言及	「お母さんが離れたら見えなくなったりすると泣き出した」、「お母さんがそばにいると安心して遊ぶ」、「お母さんがいると笑顔が増える」など	8
2. お母さんについての記述	お母さんの偉大さについての言及	「お母さんは偉大」、「お母さんのパワーはすごい」など	7
II お母さんから聞いた話で 印象に残ったこと			
1. “大変”ということ	“いつでもそこに子どもがいる”生活がいかに 大変であるかについての言及	「夜泣きが大変」、「ゆっくり眠れない」、「トイレにも行けない」、「目が離せない」、「すべてが子どものペース」、「自分の時間がない」など	19
2. “大変”であることに関連して語られた こと	“大変”であることに関係して述べられたこ とへの言及	「子育てはかわいだけでできない」、「虐待は特別なことではない」、「母親の体調管理はとても大事」、「どんなに大変でもかわいからやってみよう」、「男性のサポート、周りのひとのサポートがとても大切」など	15
3. 母親の真剣さ	母親は子どもを第一に考えているのだ ということへの言及	「本当に真剣に子どもを考えている」など	1
4. 育ててもらった親への思い	育てられる側である自分に関連して感じられ たことへの言及	「自分のお母さんに感謝の気持ちを感じた」など	2
III 実習全体を通じて考えたこと			
1. 子育てに対するイメージや考え方の変化	実習前の考えと比較して子育ての肯定的な 部分に目を向けるようになったことへの言及	「大変なことはなんとなくわかっていたが、それでも育ててみたいと思った」、「子どもは欲しくないと思っていたが、欲しいと思った」など	5
(1) 子育てに対しての前向きな内容の記述	実習前の考えと比較して子育ての否定的な 部分に目を向けるようになったことへの言及	「想像以上に大変だと思った」、「覚悟がいるのだと思った」、「楽しいイメージだった が不安になった」など	15
(2) 子育ての大変な部分、あるいは負の側面 についての記述	自分の生き方や将来の子育てについての価値 観の見直しへの言及	「早く結婚したいと思っていたが、たくさんのことを経験してからでもいい、急がなくてもいいと思った」、「将来、結婚したら、妻をしっかり支えようと思った」	9

注：有効回答 29 名

ほうが高く、実習の前後で一貫して同じ結果であった。このことは、実習に参加したことがイメージに何らかの影響をもたらしたというよりもむしろ、この実習に参加した生徒が、潜在的にそうした傾向を持っていた可能性をあらわしている。このふれあい体験実習の場となった家庭科の授業は、希望者だけが受講する選択授業であった。また生徒たちは、家庭科を選択するかどうかを決定するときに、家庭科の教師から授業の内容について説明を受け、赤ちゃんとのふれあい体験がカリキュラムに含まれていることを紹介されていた。したがって、この授業を選択した生徒の中には当初から赤ちゃんに対して肯定的なイメージを持っていた生徒が多かった可能性が考えられる。

子ども・子育て観に関しては、研究1と同様、3つの因子が確認された。このうち子どもへの興味・関心に関しては、実習に参加した生徒、参加しなかった生徒の両方に共通して、値が上昇するという結果が得られた。研究1では、実習に参加しなかった生徒のデータがなかったため十分な議論ができなかったが、研究2の結果から、子どもへの興味・関心が高まるのは高校生のこの時期に一般的な現象である可能性が示唆された。

最も興味深い結果としては、子どもを育てることに対する自信に関して、実習への参加の有無と過去の関わり経験との間で交互作用が認められたことがあげられる。すなわち、実習に参加しなかった生徒では値が変化しなかったのに対し、実習に参加した生徒、それもこの実習に参加する以前は乳幼児との関わりがほとんどなかった生徒に限って、値の変化が認められた。有意差こそなかったものの、子育てに対する自信は、過去に関わり経験がなかった生徒より、多少なりともそうした経験を持っていた生徒のほうがやや高く、これは研究1と同様の傾向であった。それでは、それまで乳幼児とほとんど関わった経験のない生徒が特に、子育てへの自信を深めたという結果についてはどう解釈すればいいだろうか。想像するに、研究2では実習回数が2回から3回に増え、しかもそばに母親が常にいた状態で赤ちゃんと関わっていた2009年度とは異なり、自分たちだけで託児を経験した。こうした、今まで味わったことのない、しかしより現実に近い体験が生徒の自信につながった可能性は考えられる。

いっぽう、実習に参加する以前に乳幼児との関わりがほとんどなかった生徒の実習参加後の「子育て

への自信」の得点が、実習に参加しなかった生徒の得点とほぼ変わらないという結果についてはどう考えるべきであろうか。質問紙調査で確かめられることには限界があり、その「自信」の中味にまで踏み込むことは困難だが、自由記述の内容からみるに、かなりの生徒が子育ての負の側面にも言及していたことは特筆に値する。「かわいいだけではできない」、「予想をはるかに超えた大変さ」などの記述は、子どもを育てることの両価性への気づきを物語っており、なかには「それでもやっぱり子どもが欲しい」、「だからこそ喜びや嬉しさもあるのだと思う」のような記述も見られた。このような子育ての両価的側面への気づきは先行研究でも指摘されており（藤後, 2001; 下中・井上・玉城・金城・西平・賀数, 2009）、子育てのリアリティーへの接近を意味していると考えられる。実習に参加しなかった生徒の「自信」の中味については想像するよりほかないが、実習に参加した生徒の「自信」のほうが、より現実に即した深みのある自信と推測することはできないだろうか。

以上、研究1、研究2を通じて、筆者らは、親子とのふれあいが、やがて子育て世代となっていく若者たちの親準備性の獲得につながる可能性を確認した。子どもの数は年々減り続け、若者たちが子どもに触れる機会が自然に増えていく兆しは残念ながらない。「育てる」という営みは、世代を継承し、ヒトという種が存続していくうえで不可欠な行為である。いつでも周りに小さな子どもがいて、世話をしたり遊んだりすることが当然であったかつてのような状況に回帰することがのぞめないのなら、また子どもにふれる機会が少なくなっていることが、虐待のようなとても残念な結末につながりうる可能性があるのなら、若い世代が子どもに触れられる機会を提供できるような安定した仕組みが今後は必要になってくるのではないだろうか。

脚注

¹⁾当初は、9月上旬にもう一度、実習を行う予定であったが、新型インフルエンザの流行により中止となった。

²⁾表3の四角で囲んだ11項目が、2回目の質問紙調査に使用した項目である。

³⁾予備分析として過去の関わり経験（クラスター分析の結果）も要因に加え、2要因の分散分析を行ったが、交互作用がみられなかったため、時期による比較についてのみ分析を行った。

⁴⁾母親には、赤ちゃんの泣きがあまりに強い場合に

は、ただちに部屋に戻ってきてもらおうと伝えた。なお、生徒の託児体験を行うにあたっては、あらかじめすべての母親にその趣旨等を十分に説明し、同意を得てあった。

謝 辞

1. 本研究に快くご協力くださった親子、生徒の皆さんに心から感謝申し上げます。
2. 本研究の実施にあたっては、名古屋市天白区を活動拠点とする子育て支援サークル「天白子ネット」のスタッフの皆さんに多大なご支援を賜りました。
3. 本研究は、平成20年中山隼雄科学技術文化財団から助成を受けて行ったものである。

引用文献

- 陳省仁 (2011) 養育性の発達 氏家達夫・陳省仁 (編著) 発達心理学概論 11章 東京：放送大学教育振興会 (pp.147-163)
- 藤原由美子・猪野郁子 (2002) 中学生の幼児ふれあい体験学習に関する研究 島根大学教育学部紀要 (教育科学), 36, 27-35
- 原田正文 (2004) 変わる親子, 変わる子育て—「大阪レポート」から23年後の子育て実態調査より— 臨床心理学, 4, 586-590
- 星野修一・日瀧淳子・吉田圭吾 (2008) 大学生における子ども観に関する一考察 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 2, 33-42
- 井上義朗・深谷和子 (1983) 青年の親準備性をめぐって 周産期医学, 13, 2249-2252
- 伊藤葉子 (1987) 保育観に及ぼす視聴覚教材の方向性の影響 日本家庭科教育学会誌, 30, 48-53
- 伊藤葉子 (2003) 中・高校生の親性準備性の発達 日本家政学会誌, 54, 801-812
- 岩治まとか (2009) 大学生における養護性の検討 東京家政大学研究紀要, 49, 133-142
- 川村千恵子・森圭子 (2006) 地域で生活する母子との交流における看護学生の体験 母性衛生, 46, 608-616
- 川瀬隆千 (2009) 学生保育サポーター事業のプログラム評価 宮崎公立大学人文学部紀要, 16, 45-62
- 鎌野育代・伊藤葉子 (2008) 中学校家庭科における幼児とのふれあい体験の教育的効果をどのように高めていくのか：アクションリサーチによる検討 千葉大学教育学部研究紀要, 56, 201-208
- 棚澤令子・福本俊・岩立志津夫 (2009) 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響 教育心理学研究, 57, 168-179
- 中西雪夫・牧野カツコ (1989) 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第3報) —「準備状態」の構成要素の分析と保育教育への示唆— 日本家庭科教育学会誌, 32, 61-65
- 中西由里・粟津幹子 (1996) 「養護性 (nurturance)」に関する一研究 — 幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較 椋山女学園大学研究論集 (社会科学篇), 27, 9-18
- 中西由里・粟津幹子 (1997) 「養護性 (nurturance)」に関する一研究 (2) — 妊婦と未婚学生の比較 椋山

- 女学園大学研究論集 (社会科学篇), 28, 81-89
- 大路雅子・松村京子 (1998) 高校生の幼児体験学習時の対児行動に関する研究 (第1報) — 特徴的対児行動 — 日本家庭科教育学会誌, 41, 31-38
- 岡野雅子 (2005) 乳幼児とのふれあい体験についての一考察 — 大学生の省察資料による検討 — 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』, 6, 1-10
- 岡野雅子 (2006) 中学生・高校生の保育体験学習に関する一考察 — 幼稚園・保育所から見た課題 — 信州大学教育学部紀要, 117, 25-36
- 佐藤洋美 (2004) 乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響 日本生活体験学習学会誌, 4, 35-54
- 下中壽美・井上松代・玉城清子・金城芳秀・西平朋子・賀数いつみ (2009) 「妊婦ふれあい体験学習」が高校1年生女子のライフプラン、妊娠・出産・育児の認識度に及ぼす影響 思春期学, 27, 194-203
- 谷向みつえ (2010) 子育て広場における臨床心理学実習の実践報告：大学生の親性教育の試みについて 総合福祉科学研究 1, 243-248
- 藤後悦子 (2001) 高校の「保育」体験学習を通しての子どもイメージの変化 家庭教育研究所紀要, 23, 108-118
- 矢萩恭子 (2007) 次世代育成としての乳幼児とのふれあい体験～中学生・高校生の「保育体験学習」に関する実践の検討～ 田園調布学園大学紀要, 2, 125-153
- 吉村真理子 (2006) 高校生への子育て理解講座—千葉県立佐倉東高等学校での実践を通して— 千葉敬愛短期大学紀要, 28, 141-152

(受理年月日 2011年10月4日)